

絵画制作と朗読の実践研究 ～紙芝居活動の報告～

A study on the practice of painting and reading - “Kamishibai” activity report -

陣内 智子、陣内 敦

I はじめに

筆者・陣内智子は、居住地である佐賀県西松浦郡有田町にある有田町立西有田中学校、有田町立曲川小学校、有田町立大山小学校で、それぞれ読み聞かせ活動をおこなっている。現在の活動歴は、中学校での読み聞かせ活動は三年、小学校での読み聞かせ活動は二年である。これらの小・中学校の読み聞かせ活動は、学校が活動グループに委託し運営されており、本活動の母体グループである読み聞かせボランティア「はらぺこあおむし」は子育てを終えた年代の女性たちを中心に構成されている。通常、絵本を読む場合がほとんどであるが、筆者は、中学生の視野を社会に広げる目的で、新聞の社説やコラムを読み聞かせに用いることもおこなった。この時、生徒たちは静かに聞いてくれたが、喜びの表情はなかった。その後、絵本に戻して読むと、以前の豊かな表情が返ってきた。この反応の変化は、改めて児童文化財が持つ感性を磨き情操を豊かにする力を実感する体験となった。学校で読み聞かせがおこなわれる理由の一つとして、読み聞かせ後に集中力が高まり、授業が静かに進めやすいという効果も挙げられている。これは、テレビやスマホの媒体による効果とも異なるものである。絵本や紙芝居は、聴覚と視覚の複合した感覚が刺激されることに加え、演者と同じ空間を共有し直接的な関わりによってもたらされる心の充足があるのではと考えられる。

本報告では、小学校でおこなった紙芝居の活動について取り上げたいと考える。紙芝居は、用いる箱を舞台と呼ぶように、演劇的要素の強い表現媒体である。舞台の箱の扉を開けると、子ども達は特別な世界に引き込まれていく仕掛けとなっている。この紙芝居の活動を通して、子どもの表情を読み取りながら、子どもの好奇心や集中力、さらに感性や情操について考察していきたいと考える。

II 紙芝居の制作

1 文学作品の選定

筆者・陣内智子と陣内敦は、共同研究を行うべく、最初に文学作品の選定をおこなった。

現代は、テレビドラマや映画などによって、様々な国々や文化の話を知る機会は増えてきているが、郷土の昔話に触れる機会は、減ってきている。近所のお年寄りや、一緒に暮らす祖父母から地元に伝わる言い伝えや昔話を聞くこともあまりない。現代の子ども達にとって、国際的な意識とともに地域への関心が必要であるとされている。地域への関心は、自身のアイデンティティーの醸成と地域愛から人間愛へと繋がっていくことが期待されている。ここでは、北部九州にまたがる“松浦党”の歴史が残した昔話を用い、これに込められた人々の平和への想いや人情を子ども達のわかりやすく伝えていくことにした。

2 紙芝居の制作

(1) 紙芝居作品：「子守り地蔵」

制作者；陣内智子

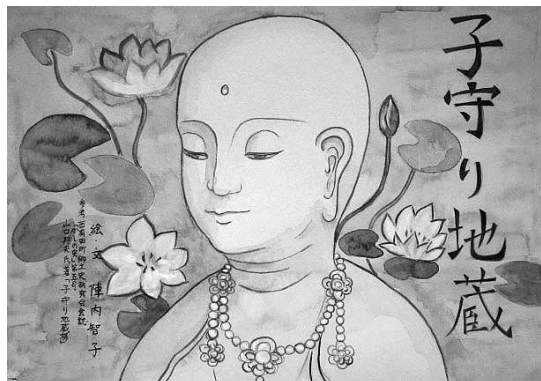
制作年月；2019年2月

制作材料等；イラストボード（マーメイド紙 1mm厚 B3サイズ）、墨、水干絵の具、筆

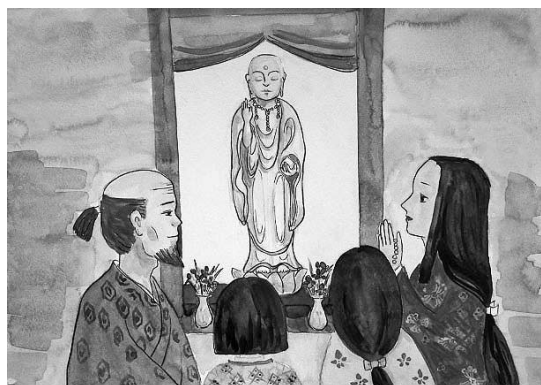
再話者；陣内智子

出典：西有田町郷土史研究会誌「かしの実」第五号より山口邦夫著「子守り地蔵様」(1995)

話の選定理由：お地蔵様や村人達によって孤独な老人が救われる話である。現在の唐津市を統治していた波多氏が豊臣秀吉によって滅亡した戦争下、悲惨な状況にありながら登場人物達のやさしさが人生の安堵を感じさせ、聞き手の心を穏やかにする話である。



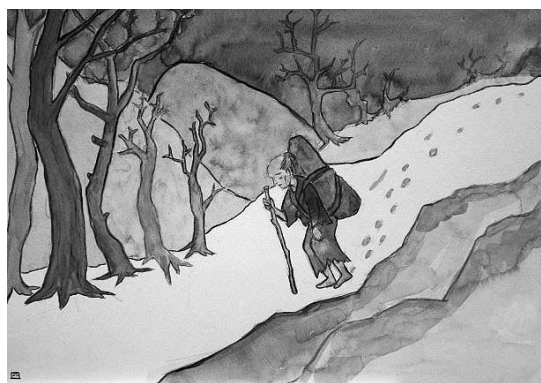
一 子守り地蔵



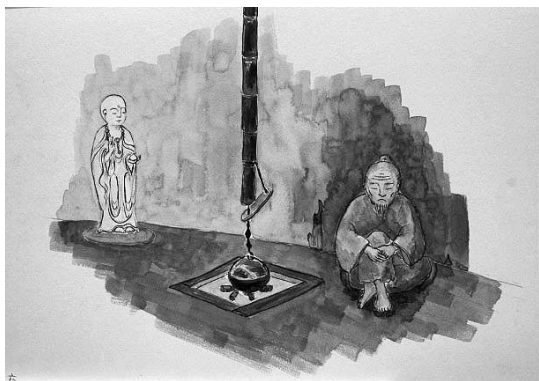
二 松浦党と呼ばれる武士団の中に、波多氏という一族がありました。鬼子岳城主といいますが、波多氏の人々は、ふもとの波多城で生活されていました。その館の奥で、子供のお守り仏として昔から大切に祀られて来た木造のお地蔵様がありました。奈良の辺りから流れて来たという仏師が作ったというお地蔵様は、とても美しく愛らしいお顔立ちで、見る者の心を穏やかに安らかにしました。老人は、その館の奥で幼い若君の守り役をしていました。



三 文禄三年のことです。時の権力者、豊臣秀吉から朝鮮攻めのことと怒りをかい波多氏は、おとりつぶしになりました。城主波多三河守と若君も死をまぬがれませんでした。老人は、波多氏の人々が心から大切にしてきたお地蔵様が館と共に焼かれてしまうのをもつた。それで、金目の物など目もくれず、お地蔵様だけを背中におぶって館を脱出しました。



四 老人は、疲れた体を引きずりながら歩きました。あたりは、低い山々がつらなっています。山の尾根伝いに土地の者しか知らない山道がずっと続いています。遠くへ遠くへとひたすら逃げました。



五 お地藏様のご利益なのでしようか？
老人は、府招村（伊万里市南波多町府招）あたりまで逃げのびました。
疲れてへとへとで、心には、ぼつかりと大きな穴が開いたようでした。
それから、老人は、山奥の古い炭焼き小屋を借りうけて住むようになりました。



六 村人達には、この老人が鬼子岳城からの落人であることはすぐわかりました。波多氏の人々に同情する気持ちの強い村人達は、老人のことを哀れに思い親切でした。
老人は、お地藏様を、大切に祀りながら静かにくらしませんでした。彼には、お地藏様しかありませんでした。



七 村でのひっそりとくらしがつづいていました。
ある日のこと、親切にしてくれる村人の子どもが病気にかかり、なかなか良くならず困っていることを知りました。
老人は、ふと思いました。あの霊験あらたかなお地藏様なら、あの子を助けられるかもしれない。
そこで老人は、お地藏様を病気の子どもの家を持って行き、「このお地藏様を子ども枕元に置いておきなさい。その内きつとご利益によって具合がよくなりますよ。」と行って手渡してやりました。



八 すると不思議なことに、その子は、ほどなく元気になりました。
他の子ども達と楽しそうに遊ぶ姿がみられるようになり、村人達を驚かせました。
そんなことがあり、老人は、次第に村人達からしたわれるようになり、彼の作られた暮らしは、かわっていききました。



九 老人の周りには子どもの笑顔が絶えません。
彼は、子ども達に読み書きを教えたり、遊んでやったりするようにになりました。次第に、村人達との付き合いも増えていきました。
一方、お地藏様は、忽ち大評判です。たくさんの人々がそのご利益に預かりたいと、かして欲しいという申込みが後をたちません。そんなわけで、お地藏様はあちらの家、こちらの家と病気の子どもの所へ大忙しで功德行脚に行かれるようになりました。

もう、山奥の老人の小屋に御帰りになることは、めったにありません。



十 時は流れ、老人は、静かに息をひきとりました。
最後まで、子ども達に囲まれ、村人達に大切にされ、天涯孤独な老人にしては、幸福な最期でした。



十一 さて、お地藏様はどうなったでしょう。
村人達は、霊験あらたかなお地藏様をもっと丁重にお祀りしなければと考え、小さな地藏堂を建立しました。
立派な地藏堂ができて、お地藏様は、今日もどこかで病気の子どもの枕元に立ち功德をほどこしていらっしゃるでしょう。
そんなわけで、お堂は御本体不在地藏堂と呼ばれるようになりました。

おしまい。

(2) 紙芝居作品：「お才観音」

制作者：陣内敦

制作年月：2019年3月

制作材料等：イラストボード（マーメイド紙 1mm厚 B3サイズ）、墨、インク、Gペン、筆

再話者：陣内敦

出典：池田徳馬著「栗ノ木峠」（2008）

源玉泉編「唐船山三星鑑」著作年不詳

話の選定理由：豪族間の抗争の中で、忠義と平和を求めた武士とその妻女の話である。現代の佐世保市と有田町を統治していた松浦氏が覇権争いの渦中に巻き込まれた戦国時代初頭の昔話であり、武士の真っ直ぐな信念と妻女の情愛が、聞き手に哀れを感じさせる話である。

お才観音

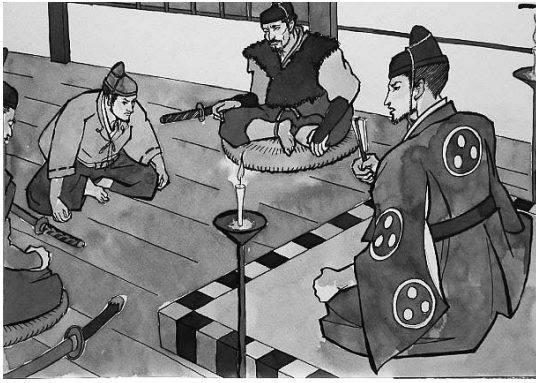
一

このお話は、戦国時代と言って日本中が戦いに明け暮れていた頃のお話です。松浦党と呼ばれる水軍が、北部九州を縄張りにしていました。この松浦党の本家は、現在の佐世保で飯盛城を居城とした相神浦松浦氏です。さらにその領地には有田の唐船城もありました。



二

元龜二年（年も暮れようとする十二月二十九日、唐船城では、城主有田五郎盛を中心に、重臣たちが顔を連ねていました。五郎盛が、「松浦党お家再建のため、飯盛城を攻める。その戦略を決める故、ありていに物申せ」という言葉が終わるや、「正月に攻めれば油断あるう」「あまりにも卑怯」「いやこちらも田植え時期に襲われたことがあした」と、目を血走らせていきま



三

雪がちらつき始めた家路の中で、右京は試算していました。本家の血筋が途絶えても、主君には変わらぬ、なんとしてもこの戦をとめなければならぬ。しかし、妻お才は身重の体、一子勝之助も五歳の幼子、飯盛城までの峠道、無事に越えられるであろうか。



四

雪は次第に激しさを増し、勝之助は一步も動けなくなりました。右京は、悔し泣きをする勝之助を背負い、荒い息のお才の手を引き、国見の西の岳を目指しました。遠くにうっすらと唐船城の影が浮かんでいきます。





五 峠を登ったところで、お才は寒さと疲れで倒れてしまいました。そればかりか、お産の陣痛が始まったのです。

「お才、しっかりせよ、ここで産んではならぬ」右京はお才を励まします。「もうしばらくの辛抱ぞ。あそこに炭焼き小屋の灯が見える」とお才の体を抱え上げました。

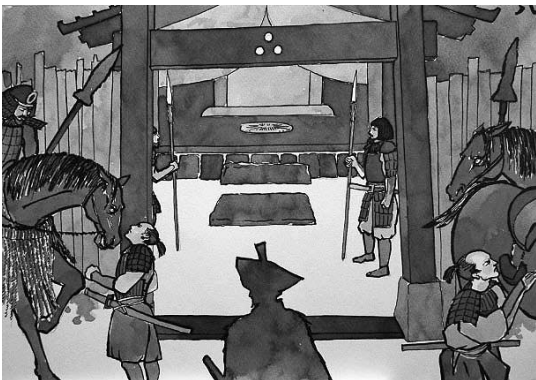


六 「たのもう」右京は声が風に飛ばされぬよう、ありったけの声で呼びました。この声で、炭焼きの女房が外に出て参ります。「妻が急に産気づき、難儀している。お助け頂きたい」、女房は三人を家の中に引き入れてくれました。

せわしく床を整え、お才を横たわらせると、女房はお才の手を握りながら言いました。「お侍様、粗末な小屋ですが、おまかせください」。右京は、「火急の用で飯盛城に参らねばならぬ。明日戻るまで、息子ともどもお願いいたします」と炭焼き小屋を後にしました。

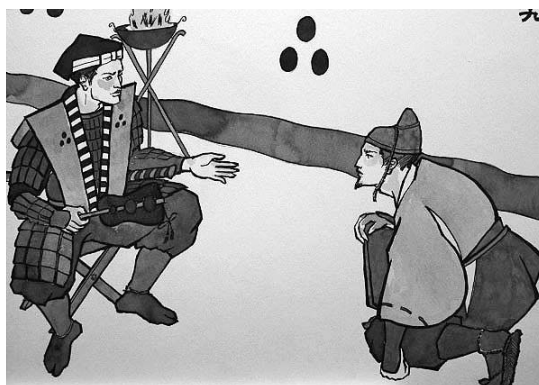


七 寝静まった里美の集落を過ぎ、さらに一里ほども歩かぬうちに、西の海が見え始めました。雪もおさまり、輝く海原を背景に、はつきりと飯盛城と愛宕山が浮かび上がりました。右京は、歩みを早めました。「この戦、けつして起してはならぬ。これ以上、血をながしてはならぬ」。



八 飯盛城下に入ると、右京は戦支度をする相神浦の家臣たちの姿を目にしました。馬に鞍を着ける者、馬上で武器の紐を結び直す者、門の内側で槍を立てる者、いずれも目に力がみなぎっています。

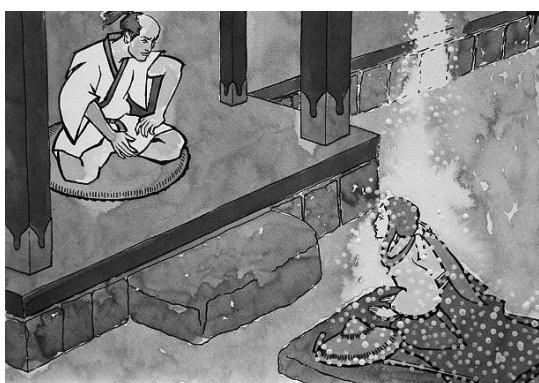
不思議に思いながら城門をくぐり、拜謁を願いました。



九

城主九郎親公は、右京が注進しようとするのを遮って、「大儀であった。そこもとの妻お才がから、すでに話は聞いた。もうすでに平戸の兄者にも援軍を頼んでおる」。

右京はいぶかしく思い、「おそれながら、我妻お才がここに來たと申されますか」と問い返しました。



十

九郎親公の話はこうでした。「夜も明けぬ寅の刻に目通りを願ひ出る者があるという。それも唐船城お目付け役そちの妻女というではないか、ただならぬ氣配に、門を通したという。私も引き寄せられるように会すると、なんと唐船城が兵を挙げているというではないか。不思議にも、ご妻女の体は雪ですっぽりと包まれたかのようにであった」。

右京は、お才の姿を探しましたが、どこにも見当たりません。



十一

右京が、その晩、床に就くと、人影が現れました。「あなた様、お才です。峠の小屋でお別れした後、女房殿の介護のおかげで男の子を産むことができました。私はそこで力尽き、この世のものではなくなりました。人魂となつて、後を追いました。私が、私のほうが先に着き、ご無礼ながらご主君に上申いたしました。あなた、子ども達のこと、よろしくお願いいたします」と言うなり、消えてしまいました。



十二

右京は、未明に馬を走らせ、西の岳の峠に着きました。炭焼き小屋に入ると、勝之助が母の亡骸にすがり泣く姿が目に入りました。右京は、乳呑児を胸に抱いて「お才、よくぞ命を繋いでくれた」と声をつまらせ、「ゆつくり休むが良い」と涙しました。



十三

明けて、正月四日、有田唐船城と相神浦飯盛城の間で合戦が起こりました。この戦は、右京とお才が命を懸けて止めようとした戦です。場所は、相当原といって現在の佐世保市柚木あたりになります。有田氏の兵は三百五十騎、相神浦と平戸の連合軍はその倍余り、戦果は互角、合わせて百人以上の戦死者を出しました。その屍は、柚木の人々によって供養されたそうです。



十四

その後、お才が命を落とした里美では、夜な夜な人魂が現れるという噂が立つようになりました。忍び泣きが聞こえ、人影が現れ、消えるというのです。我が子のお乳が心配なのか、相当原の戦いを嘆いているのか、その理由は定かではありません。



十五

里美の人々は、これを哀れに思い、お才の魂を鎮めるために、有田と相神浦を見渡せる場所に、お堂を建て観音様を祀りました。今もお才観音とよばれ、安産祈願の参拝者がたえない場所となっています。これでこのお話は終わりです。

2 紙芝居実演の概要

■有田町立大山小学校

2019年3月7日(木) 朝の読み聞かせ時間(8:15~8:30) 於:6年1組

「子守り地蔵」「お才観音」の紙芝居作品の実演

実演者:陣内智子(本校読み聞かせボランティア) 陣内敦 協力:校長 クラス担任 他



V 活動の振り返りと展望

1 作品制作の振り返り

(1) 再話について

昔話の選定については、筆者それぞれが自由におこなったが、どちらも松浦党の戦いであり安穩を願う趣旨であったことは偶然であったが、同時に現代の子ども達に伝えたい内容の必然とも言えた。歴史の中から何を汲み取りどのように伝えていくかというメッセージの重要性を感じる場所であった。

(2) 紙芝居の展開法（コマふり等）について

紙芝居では、舞台演出のように画面を変えていくダイナミズムが必要であると感じた。じっくりと描写していく展開から、急激に場面を変化させる手法については、制作を重ねていくことでさらに研究をしていくことが必要であると感じた。

(3) 描画について

1枚の絵画を描き進めていくことに比べ、複数の画面で構成していくこの紙芝居の描画は、登場人物の動きや表情の幅によって表現する内容が大きくなる。これも、今後の修練が求められるものであると実感した。

2 実演の振り返り

(1) 練習について

朗読の練習をおこなうにあたり、発声法や速度、間の取り方や感情の込め方などに気を配った。この中で、改めて言葉が持つ伝達力の大きさを意識することができた。

(2) 実演について

いつも生活している場所で、想像を絶することが起きていたことを知ることは、大きな驚きになったのであろう。いつもに増して好奇心や集中力を示していたようである。戦争や平和が主題となった昔話であることから、子どもに心に何が残ったかを知るには時間がかかると思われる。今後も子ども達の感性や情操に訴えていく活動を続けていきたいと考えた。

3 今後の活動の展望

来年度は、佐世保の児童センターにおいてお話会の実施を計画している。佐世保や有田の昔話を題材にした紙芝居をさらに制作し、子ども達に伝えたいと考案している。

(参考文献)

- 1 西有田町郷土史研究会誌「かしの実」第五号より山口邦夫著「子守り地藏様」（1995）
- 2 池田徳馬著「栗ノ木峠」（2008）
- 3 源玉泉編「唐船山三星鑑」著作年不詳